



シンポジウム「温泉と心の健康づくり ～世界から注目されるポストウェルネスとしての日本の温泉～」

ファシリテーター：

NPO 法人 健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人氏

登壇者：

ハンガリー大使館 一等書記官・文化担当官 コバーチ・エメシェ氏

ドイツ・フライブルク大学医学部 教授 ヨハネス・ナウマン博士（※ONLINE 出演）

ドイツ・バードクロツィンゲン ヴィタ・クラシカ 副所長 マークス・マッツ氏

イタリア・アバノ・モンテグロット温泉ホテル協会 元会長、元アバノ市副市長 マッシモ・サビオン氏

PROFILE

NPO 法人 健康と温泉フォーラム 常任理事 合田純人氏

世界保健機構(WHO)と公式関係をもつ国際温泉気候連合 (FITEC) のアジア・太平洋協議会 (FAPAC) 前事務局長。健康社会学専門。現在は、健康と温泉フォーラム常任理事。温泉地の広域連携や産官学の連携プラットフォーム作り、温泉療養の医療費控除等の政策提言や、温泉関連の人材育成に尽力し、国内外の温泉関係者との幅広いネットワークを築いている。2018 年、大分県で開催された世界温泉地サミットでは、医療・健康分科会を統括。静岡県 ICOI プロジェクトのアドバイザー。

ハンガリー大使館 一等書記官・文化担当官 コバーチ・エメシェ氏

2006 年、エトヴェシュ・ローランド大学日本語専攻修了。2008 年ハンガリー国立ダンス大学民族ダンス専攻卒業。2016 年、武蔵大学大学院人文科学研究科社会学科専攻修了。2017 年、カーロリ・ガーシュパール・カルビン派大学大学講師。2020 年よりハンガリー大使館文化担当官。日本語が堪能。

ドイツ・フライブルク大学医学部 教授 ヨハネス・ナウマン博士（※ONLINE 出演）

ドイツの温泉地・バードクロツィンゲン VITA CLASSICA クリニック所長。保養地医学全般、自然医学、温泉療法、アクアフィットネスや漢方・指圧・物理療法などの伝統療法、リハビリテーションなど幅広い分野を専門

とする。ヨーロッパ温泉物療医学会理事長（EIPTB）。

ドイツ・バートクロツィンゲン ヴィタ・クラシカ 副所長 マークス・マッツ氏

ドイツの温泉地・バートクロツィンゲン VITA CLASSICA 副所長。ヨーロッパの温泉地の健康づくりと施設等の運営、ヨーロッパの医療関係企業のマーケット分析者として、スウェーデンやスイスで活躍後、南ドイツの温泉施設の運営と健康づくりプログラムの開発に尽力。

イタリア・アバノ・モンテグロット温泉ホテル協会 元会長、元アバノ市副市長 マッシモ・サビオン氏

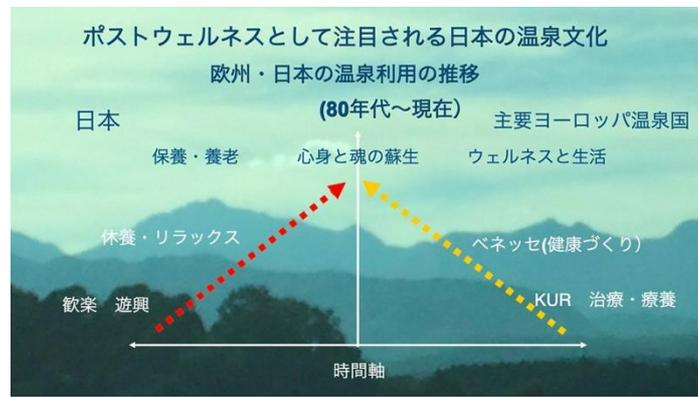
プレジデントホテル・テルメ 元オーナー。現在は日本の温泉を見習い、丘陵地に心身の健康を回復できる B&B（Bed & Breakfast）を開業。ポスト・ウェルネスとしての温泉と自然の力の可能性を模索する。



**合田氏から。今、ヨーロッパをはじめ
日本の温泉が見直されてきている。**

合田氏：

1918年、第一次世界大戦が終戦した翌年に、ハンガリーの首都ブタペストで欧州主要温泉国が中心となって、国際温泉気候連合（FITEC）が設立され、戦争による傷病者の治療やリハビリテーションを目的にした本格的な近代的温泉病院が建設されました。それから約100年、温泉医療は時代時代の要請を受けて進化していきました。特にヨーロッパでは、リュウマチやアレルギー性疾患などさまざまな分野で温泉活用が進みました。しかし、同時に、近代医学の目覚ましい発展と同時にこれらの疾患に対しての特効薬が次々に開発・普及され温泉医療はしだいに衰退し、その治療は一部の特異な泉質を持つ温泉地などに限定され、例えば循環器疾患の炭酸泉などで、多くの温泉は社会保険が利用できる療養型からストレスなど個人の身体と心の保養や休養を中心としたウェルネス型の分野に転身し、最近ではさらに痩身や美容などに加え、アミューズメント・要素を持つスパ・リゾート型など短期休養型に変身しようとしています。



このように、ヨーロッパの温泉地の主要トレンドとなったウェルネス型は、美容・痩身といったジャンルのみならず、特に現代社会の精神的なストレスを開放するリラクゼーション効果が注目され、中でも森林浴や海浜気候療法など自然を取り組んだナチュラルセラピーの効果が注目されています。

そして、特に世界的パンデミック COVID-19 の反動で世界的なグローバル化が進む中、ポストウェルネスという、ウェルネスを超える次の時代のウェルネスというものは、魂と心の再生にいくのではないかと。イタリア、ドイツを含め、欧州主要温泉国が今、自然と一体となった日本の伝統的な温泉文化に熱い注目を注いでいます。

日本の温泉医学の歴史は明治維新以降、近代化の並に乗り切れず、公衆衛生の中央集権化が進む中、徐々に衰退の道を辿っており、今でも温泉医療は保険では認められておらず、温泉医学研究所や大学の医学部の講座等も高度成長時代の80年代の後半を最後にすべて閉鎖されています。

そんな中、近年、COVID-19の対応などから、戦後、栄養、運動、休養としてきた国家の健康政策が、個人の健康は自己免疫力を上げ、個人でしっかり管理する必要があるという方向にシフトしてきました。

そして、情報化が進み、人と人の絆が薄れ、ストレスが益々蓄積される社会環境に対応した、心の健康づくりが叫ばれ、温浴や自然環境等を活用して心身のバランスをとっていく伝統的な日本の温泉文化が世界から注目されています。

ここで私たちが日本の温泉を考えると、少し視点を広げ、ヨーロッパから見た日本の温泉の魅力や特徴をこのシンポジウムで一緒に考える機会になればと思います。



コバーチ・エメシェ氏から温泉大国・ハンガリーについて。
歴史を感じる温泉施設が多く、観光客に人気。



コバーチ・エメシェ氏：

私からはハンガリーの温泉の魅力についてご紹介させていただきます。ハンガリーは温泉大国なんです。世界ランキングの中では5位に位置します。ちなみに1位は日本、2位はアイスランド、3位はイタリアです。

ヨーロッパ大陸の真ん中にある小さな国が、どうして温泉大国になったかということからお話したいと思います。約1000年前、ハンガリーにはかつてパノニア海という海があり、この海のおかげで約1300の源泉が残されています。そのうち350ほどが施設で使われています。

この海は今ではもう大陸になってしまい、なくなってしまっています。エリアによって温泉の成分も変わり、ドナウ川の西側はカルシウムやマグネシウム、炭酸水素塩泉が多く、南や北側は硫黄の温泉が多く存在しています。



ブダペストは世界で唯一、温泉を持つ首都です。80の源泉を持ち、8つの温泉施設や温泉・プールといった20の施設があります。今回はそのうちの5つの温泉施設をご紹介します。

ゲッレルト温泉は、1100年頃の古くから病院と温泉治療として使われていた施設で、現在では、アールヌーボー様式のデザインで人気のスポットになりました。セーチェーニ温泉は1870年代に見つかった温泉で、黄色の建物が美しい温泉です。温泉に入りながらチェスをやっているおじさん達の写真がパンフレットに使われ、有名になりました。ここの温泉は30度くらいのため、長時間過ごすことができます。

ルダシュ温泉は、ドナウ川のすぐ横にあり、最近、リニューアルしています。体だけでなく目楽しむことをコンセプトにしている、夜景を見ながら過ごすことができます。こちらの建物の柱はトルコのような柱になっています。実は、1541～1699年まで、ハンガリーはオスマン帝国に支配されていました。トルコ人も温泉が好きな国民で、彼らがいくつかの温泉の源泉を見つけ、施設をつくっています。ヴェリベイ温泉やキラライ温泉もオスマン帝国が残した温泉で、これらの施設にもトルコらしい建物が残されています。

ブダペスト以外の施設もご紹介します。ハンガリーの東北側にあるエゲルサローク市にある温泉施設「サリスリゾート」では、石灰岩から68度の温度の水が湧き上がっています。

ここからまた近いところのミシュコルツタポルツァ市に、1000年の時をかけて水が穴をつくった石灰岩の洞窟温泉があります。とても珍しい温泉なので、遠方からたくさんの観光客が訪れるところです。

また、マートラデレチケの温泉は、水がない二酸化炭素のガスが上がってくるガスの温泉です。血管によく、高血圧の治療ができる温泉として使われています。

最後に、私が大好きな温泉をご紹介します。ハンガリーの西側にあるヘーヴィーズ温泉湖は、ヨーロッパ最大の温泉湖です。33～38度の温泉で、40m深いところから水が湧き上がり、一年中、泳ぐことが可能です。リュウマチと骨折の後に良いとされ、1日30分ほど浸かると効果的と言われています。



ヨハネス・ナウマン博士から温泉の医療的価値と コロナ禍以降の課題について。

ヨハネス・ナウマン博士：

私は環境医学、理学療法、温泉療法学を専門とする医師をしています。フライブルク大学に長年勤務し、温泉医学の学部長を経て、現在は、ヨーロッパの理学療法および温泉医学に関する機関の理事長をしています。こちらではドイツにおける温泉医学に関して、医師たちの研修の場になっています。また、主にドイツを中心としたヨーロッパにあるさまざまな温泉地や癒しを与える森林に、認証を与える機関になっています。日本とドイツには、二酸化炭素を含む癒し効果がある温泉があるという共通点があります。

今日は、現在のヨーロッパの温泉医学と、将来的な動向についてお話しさせていただきます。

ヨーロッパ、アジア、そしてアメリカにある温泉施設の数、非常に似通ったものがあります。日本はウェルネスの経済大国になっており、ヨーロッパのどの国よりも順位が高くなっています。ドイツ、フランス、ハンガリーなどにはたくさんの温泉施設があり、温泉医学の伝統があります。

2017年の世界全体の温泉施設における収益は560億ドルあったと言われています。日本とドイツを比べると、日本は個々のパーソナルケアやビューティーの部分に力を入れているようです。

コロナ禍において、温泉街での訪問客数がかなり減少しています。ヨーロッパの温泉施設や保養地では、存続が厳しい状況にありました。今、観光的な側面と、ウェルネス的な側面の両方を組み込まなければならない状態にあります。ただ、このウェルネスの市場は、将来的には機運が高まっていくと思います。

ただし、観光的な面と、医療的な面とは分けて考える必要があります。しかし、経済的な面から、娯楽やウェルネスの可能性も模索していく必要があります。

日本もヨーロッパも、人口全体の高齢化、慢性疾患、ウイルスの世界的な流行など、さまざまな医療課題を抱えています。こういった問題は、スパ・リゾート温泉や保養地を利用することにより、対処することができるのです。



たとえば、休日に体の調子が良くないけれど、病院に行くほどでもないというときは、温泉施設で対処することができます。日本やヨーロッパでは、温泉を使ったさまざまな施策があり、温泉の効果というのは科学的に証明されたものなのです。例にあげるなら、死亡率の低下、心臓発作の発生率の低下、がんの予防、精神疾患、認知症などにも効果的という研究結果が報告されています。

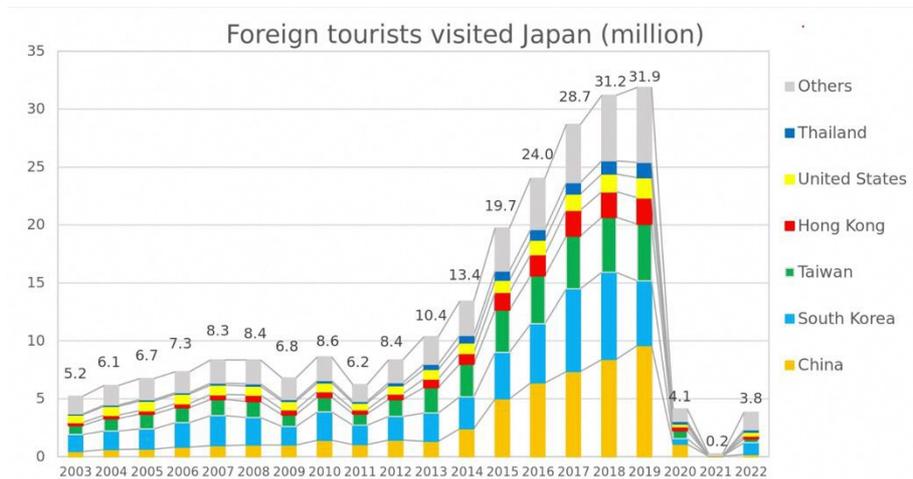
ヨーロッパでは、温泉治療がさまざまな病気に使われており、病気によっては30~70%、リスクが減ることが証明されています。しかし、こういった効果があるにも関わらず、コロナ禍では難しいものがありました。温泉施設も他の業種と同様、休業を余儀なくなり、営業再開も他の業種よりもさらに遅く、一番最後でした。

そのため、ヨーロッパでの温泉医学は、コロナ禍により、経済だけでなく、医療面でも深刻な影響を受けました。温泉の効果というものを、声高に主張していく必要があります。

高齢化が進む社会の中では、深刻な病気を予防する意味でも温泉医学にはニーズがあります。温泉リゾートの事業者が、さまざまな課題に取り組むようなプログラムを開発し、そして自ら変化し、ウェルネス、栄養、運動、ビューティなど、それらの分野に取り組むことができれば、将来的に明るい可能性を見ることができます。



マークス・マッツ氏からヨーロッパでの新しい形での温泉サービスの開発について。



マークス・マッツ氏：

私からは温泉のサービス市場、そして日本の温泉の将来についてお話させていただきます。

温泉というのは常に健康を増進する効果があるということで、その価値を認められてきました。日本やアイスランド、ドイツ、チェコ、そしてハンガリーには、有名な温泉施設がたくさんあります。毎日の生活で疲れているとき、活力を得たいなというときは温泉施設を訪れると良いと思います。ウェルネスリゾートやスパは、観光ツーリズムの高まりによって、温泉を使った治療の需要が高まりつつあります。今、世界中で新しい温泉関係のサービス開発に投資しているところです。

1350万ユーロほど投資して建設した新しい温泉施設では、木材や天然石、LEDの照明を使い、非常に特別感があるプールを用意しました。リラクゼーションルームも緑を配置し、質高く仕上げています。食事はヘルシーで質高いものをケータリングで用意。ゲストに満足感を味わってもらえるよう、工夫しています。周辺の見事な景色を楽しみながらヨガ体験ができるなど、温泉以外にもさまざまなプログラムを用意し、訪問前にオンラインで予約できるようになっています。

医師の診察ルームは、医者と患者が近いところにあり、必要な診察がすぐに受けられるようになっています。また、こちらではボトックスの治療も受けられるようになっています。

また、3500 万ユーロを投資した、Nouri という新しい四つ星ホテルは、部屋数 100、レストラン、ルーフトップバー、マッサージルームがあり、VITA CLASSICA クリニックと屋根付きの通路があるため、行き来がしやすいようになっています。

温泉の癒し効果というものは、科学的な研究により裏付けされ、温泉学者、医師のサポートにより、包括的で先進的なやり方で温泉の認知度を高めていっています。また、環境にやさしい商品や製品の需要・認知が高まっており、温泉を持続可能なリソース資源として使おうという動きがあります。天然資源を保護し、維持するといった意識も、世界的なパートナーシップや取り組みに繋がっています。

今、日本の温泉は、世界中から注目を集めています。多くの人が温泉の癒しをはじめとする様々な効果に期待を寄せているのです。私自身も 2018 年にさまざまな温泉を訪れてきました。東京、大阪、京都の観光もしましたが、旅館で体験した温泉が忘れられない記憶として残っています。日常生活の中で嫌なことがあっても、あのかのときの体験を思い出すだけでリラックスした気分になれるのです。

近年、デジタル化が進み、スマートフォンなどのデジタルデバイスを使った人との接触も増えており、そしてそれだけでは寂しい思いをしていると思います。スマホで誰かの意見をみて、それで意思決定をするような傾向があります。

そのため、サービスを提供するときは、あまり多くを与えず、明確でなければなりません。人にとって交流したり、おいしいものを食べたり、心と健康療法に焦点を当てたものなど、いいなと思えるような感覚を起こさせるものである必要があります。そして、これらのサービスを提供するときは、心がこもったものでなければなりません。

2024 年に向けての予測としては、日本は観光市場として国際的に重要な地位に着くと予想されます。2025 年には大阪万博があり、海外からの観光客は記録的な数になると考えられます。こういった観光客を大都市から地方に向けさせ、温泉に来ていただければと思います。



マッシモ・サビオン氏からイタリアの温泉活用についてと 日本の温泉文化とおもてなしの素晴らしさについて。



マッシモ・サビオン氏：

日本には 30 回以上来ており、毎回、訪れるたびに日本の文化の新しい側面を発見しています。

私はイタリアにあるアーバノ・テルメというところから来ました。ここには 110 の温泉ホテル・施設があり、私はこれらのホテル協会の代表を長年務めていました。アーバノ・テルメは、ドイツ、フランス、スイス、オーストリア、イギリス、そしてイタリアから世界中の人が訪れるヨーロッパにおける重要な温泉地です。摂氏 87 度の地下の土壌から温泉が湧き上がり、主な成分は塩分、臭素、ヨウ素などです。

古代ローマ時代、温泉は非常に重要な文化のひとつであり、その後、温泉文化がヨーロッパ中に広まりました。20 世紀になると、温泉の治癒的医学的重要性が高まってきました。30 年ほど前から、イタリアでは国民健康保険の対象になっており、泥のお風呂や温泉を 12 回使えるというプログラムも、健康保険を使用することが可能なのです。

今日は、新しい概念・ポストウェルネスとしての温泉についてお話しさせていただきたいと思います。これはヨーロッパではあまり使われてこなかった概念でしたが、コロナ禍以降で使われることが多くなりました。私は山中、別府、伊豆、熱海、大分、赤沢、湯河原、竹田、湯原、箱根など、日本中のさまざまな温泉や旅館を訪れましたが、どの温泉地もそれぞれに独自性があり、忘れられない貴重な経験を得ることができました。日本の温泉は自然と一体化し、日本の文化の中で何世紀にも渡って重要な部分となってきました。日本の温泉は、体への効果はもちろん、精神への効果が高く評価されていることが、日本の特徴です。

ポストウェルネスとしての温泉は、日々、ストレスが多い中、休息や精神力やそのエネルギーの回復が必要となっており、その回復のためには温泉が好ましいという考え方です。温泉に浸かることで、心身をケアし、リラックスし、疲れた筋肉をほぐし、そして日々の緊張感が解きほぐされます。また温泉の周りの自然の美しさを体験することは、マインドフルネス、つまり自分への意識の集中ができるのです。

温泉は海や山の近くにあり、自然に近いというのが重要な部分です。自然に囲まれているという感覚を得ることで、環境とも繋がっているような感覚を得ることができ、心の中の平和を見つけ、自分の内面とも繋がることができます。

温泉は、日本の文化や伝統に深く根付いており、温泉には癒し効果があるということを信じていることが文化のひとつにもなっているのです。先祖から先祖へと伝統が継続され、温泉は何世紀にも渡って利用されてきました。

そして、温泉に入る前に、清めの儀式として体をきれいに洗いますが、こういった儀式は非常に象徴的で、実

用的な行為だと思っています。

非常にストレスが多い社会において、また、ポストコロナにおいて、日本の温泉をいかに効果ある形で使うかを示すには良い機会だと思っています。温泉は静かなところにあります。日々、多くの人に囲まれた暮らしの中では、大きな温泉よりも小さな温泉の方がリラックスできます。

温泉の温かさ、静かで落ち着いた環境、何百年にも渡る伝統というものは、私たちの生活の中で必要とされているものなのです。

日本には“おもてなし”という言葉があり、これは翻訳が難しい概念で、日本独自のやり方です。心のこもった最高の無償の奉仕を行うということを意味しています。日本の温泉は、おもてなしの完璧な例だと思っています。ありがとうございました。

質疑応答 1：温かい水と天然温泉で効果は異なるのか。

合田氏：

日本の温泉をもっと海外にもアピールしたいし、見直すことで、伝統や温泉の新たな価値を再発見になればと思います。この会場には実務経営者や医師もいますし、ぜひご意見・ご質問をいただければと思います。

入浴施設のレジオネラ対策を行う団体の方：

マークス・マッツさんに、ホットスプリング、つまり温かい水を使ってなのか、天然の温泉を使ってなのかの健康管理かどうかを伺いたと思います。

マークス・マッツ氏：

温かい水と天然の温泉には大きな違いがあります。特に天然の温泉には、さまざまな鉱物資源が入っており、それは、体に良い効果を与えます。

質疑応答 2：日本とヨーロッパの温泉に対しての考え方の違いについて。

齊藤雅樹氏（東海大学海洋学部教授）：

昨日、別のシンポジウムで報告されていたことなのですが、日本の一部のアンケート結果によると、健康目的で温泉に入っている人は 15%ほどで、60%は温泉が好きだから入っているという報告でした。日本とヨーロッパでは状況も異なると思いますが、それについてどう考えられているか、ヨハネス・ナウマン博士にお聞きできればと思います。

ヨハネス・ナウマン博士：

温泉に含まれる二酸化炭素ガスや鉱物資源などが非常に効果があります。体に問題がある方は、温泉に入ることによって治療効果が得られるだけでなく、病気等の予防にもなりますし、健康な状態が続きやすくなります。世代問わず誰にでも効果が認められるのが温泉の利点になります。

東海大学 齊藤氏：

マークス・マッツさんがおっしゃったように、温泉により、気持ち良くよくさせるのもまた、ある種のビジネスなのかなと思いました。ウェルネスに関しては、ドイツをはじめヨーロッパからのアプローチと、日本人が思っているアプローチがすごく対照的なのだと感じました。

質疑応答 3：諸外国における、温泉の医療保険適用について。

森康則氏（三重県保健環境研究所主査研究員）

日本の温泉学の中で、医療保険の適用になることがひとつの悲願なのかなと思います。諸外国で医療保険適用を求める動きというのがあるのかについて、わかる範囲で教えていただければと思います。

マッシモ・サビオン氏：

保険適用に関しては、イタリアがヨーロッパではトップだと思います。アーバノ・テルメでは、温泉に入るとそれは社会保険の対象になります。先ほども申し上げましたが、年間 12 回温泉施設に入った場合、その費用を政府が補填してくれます。

また、これは EU で認められた機関なので、ドイツの観光客がアーバノ・テルメで温泉に入った場合は、民間保険の適用になります。ドイツに帰国し、自分が加入している民間保険の適用を受ければ、費用が支払われるという仕組みになっています。

マークス・マッツ氏：

今後、日本もヨーロッパも、高齢化により医療費が高騰していくと思われれます。そういった中で、政府がこのような温泉施設での療養を、100%あるいは半額等補填するよう、プッシュしていくことが重要だと思われれます。そして費用だけの問題ではなく、認証についての問題もあります。政府が資金を補助するのは、一定のサービスを提供して効果があるという認証を得ている施設である必要があると思います。そして、それらの機関に対する認知度や質の部分も大事な部分です。

森康則氏：

日本はなかなかそこまで至っておらず、一部、税制優遇がある程度に留まっています。医療保険を適用するにはかなり高いエビデンスが必要ということで、そのエビデンス収集を今、やっているんですが、今後も継続してやっていきたいと思っています。

合田氏：

1867 年、明治維新のとき、当時の厚労省にあたる医局が、3、4 年かけて日本の医療政策をいうものを決めていました。漢方などの伝統医学がネガティブだとして一旦否定され、近代医学を採り入れる枠から外されてきました。ただ、漢方は 1960 年代だったと思いますが、それまでのさまざまな動きの結果、徐々にその提供範囲が増え、今の健康保険の適用に繋がっています。

私たちも、ここでもう一度、日本独自の歴史を持つものを再検討していく必要があります。私からの提案としては、群馬県が発表されたと思いますが、温泉文化をユネスコの無形文化遺産として登録しようという動きがある中、温泉の健康資源としての評価というものを今後、社会的にどう取り上げていくか。これからの高齢化の中で、私たちに必要な治療としてどのように活用していくべきなのか、保険適用を考える前に、今一度根本から考えて見る必要があると思います。

また、イタリア、ドイツ、フランス、日本という各国が連合を組んで、世界保健機関（WHO）に、非感染症として、今問題となっている、アルツハイマー、認知症、そして、より軽度の精神的な心身の疲労を癒すために、温泉や自然を活用するモデルプランを創ろうという動きもあります。グローバルな形の中で、健康に関して、健康文化資源としての温泉をどう活用していくかがこれからのアプローチのポイントだと思います。

質疑応答 4：保険制度についてより具体的に。医師が判断するのかどうか。

観光業のシンクタンクの方：

保険制度に関して、もう少し具体的に教えてください。国民健康保険なのか、社会保険なのか、民間保険なのか、またヨーロッパではかかりつけ医という制度があると聞いているのですが、保険を使うときは一度、医師が判断してから保険が使えるようになるのか。また、医師が判断して医療保険を使うとすると、処方の中では西洋医学的な見地から薬を処方するのか、自然療法の温泉なのか、保険点数の部分も踏まえて、その辺りが気になります。

ヨハネス・ナウマン博士：

かかりつけ医が病気を診断した場合には、西洋医学の見地から社会保険の適用を行います。ただ温泉学ですと、少しそういったものからかけ離れて、自然療法的な形で治療を促すような医師はあまり多くはいません。ドイツでも 1990 年になってようやくそういった医学に対しても保険適用になりましたが、自然療法といったものが実際に効果があるかについて、治療して証明しなければならない部分があります。

質疑応答 5：近年、子どもの入浴率が低下。何か対策があるのかどうか。

伊豆の旅館施設のオーナー：

近年、13 歳以下の子どもの入浴率が下がっています。私が小学生だった頃はほぼ 100% だったのですが、近年は 10~15% ほどに下がっています。これは将来的に日本の温泉文化が薄れてしまうことを危惧しています。子どもの入浴率が高いようであれば、どのような対策でその数字を保っているのか伺えればと思います。

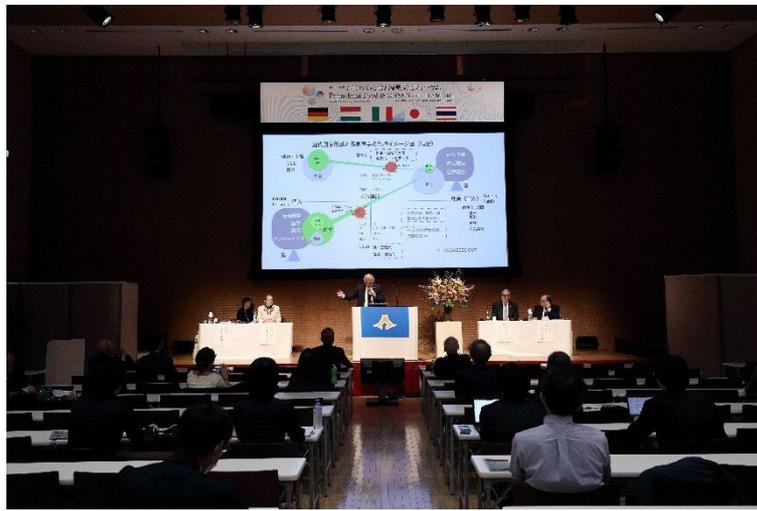
マークス・マッツ氏：

私が務めているドイツの施設は、温泉の温度が 34~38 度になっています。鉱物資源がたくさん含まれているので、3 歳未満のお子さまは入れないようになっています。3 歳以上であれば親の監督のもと、入ることができますが、入浴は 20 分までとしています。トレンドにもなっているので、休日に温泉を利用する家族連れは増えていますね。

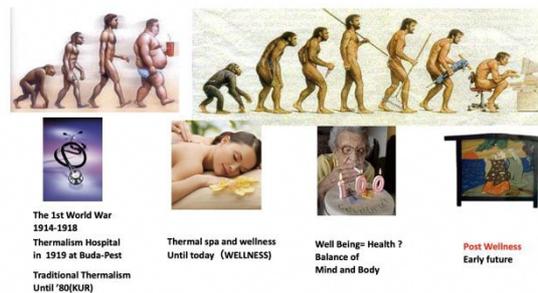
私どもの施設は、温泉の泉質もサービスもよく、施設もきれいなので、安全に利用することができます、入っていて気持ちが良いからです。そのため、3 歳以上のお子さまのためにプールをつくりました。プールの方は鉱物資源の含有量が少なくなっているため、お子さまでもプールで長く泳いでもらうことができます。

コバーチ・エメシェ氏：

ハンガリー側からの答えですと、ハンガリーでは温泉にはどのような成分が入っていて、プールの横に何歳から何分入れるかが規定され、かなり厳しくなっています。濃度が強い温泉の場合は、14 歳以下は入れなかったりするため、管理者が子どもの入浴を止めるようになっています。ただ、親は入ってよくて、子どもが禁止となってしまうと、不都合もあります。特に最近子ども連れのお客さまが増えていますので。そのため、最近では、温泉水のプールと、普通の水のプールと両方がつくられるようになってきています。



最後に合田氏から。世界一の温泉国として
温泉という健康資源を世界に提供できるようにしていければ。



合田氏：

最後にまとめさせていただければと思います。約 100 年前、スペイン風が流行り、何十万人の人が亡くなり、そのあと、グローバリゼーションがたいへん加速しました。世界的なパンデミックを引き起こしたコロナが終わり、これからグローバリゼーションの温泉化が急速に進んでいくと思います。

その中には年齢制限の問題、療養の問題、保険の問題、そして施設側の基準の問題といったさまざまな課題があります。

しかし、今、お話しがあったように、世界的な規模での文化遺産として、ユネスコへの提案を含め、温泉というものをもう一度、地域の生命資源、健康資源として見直す動きがあります。日本のみならず、ヨーロッパ各国、そしてこれから大事なのは東南アジア、中央アジアを含めた国々が、高齢化が進む中、温泉の効果というものを体験し、そして提供していくことが日本の義務だと思います。それが世界一の温泉国として、日本はリーダーとしてやっていくべきではないかと思っています。

私たちも、世界に対して温泉という目に見えない健康資源を提供できるような、国にしていければと思います。そのためには、専門家や技術者の方々と医学的な意味を含めた交流を加速させることで、新しい温泉の時代が来るのではと信じています。長時間ご清聴ありがとうございました。